

「人道」を貫いた杉原千畝 ～杉原幸子著『六千人の命のビザ』～

入試・広報課進学推進員 佐々木 律成 (2018.1.9)

杉原千畝は第二次世界大戦期リトアニアで日本領事館に在職中、ユダヤ難民を安全な地に渡航させるため独断で日本通過ビザを発給し、ナチス・ドイツの迫害から約 6000 人の命を救った外交官である。戦後 70 周年だった 3 年前の暮れから上映された映画「杉原千畝 スギハラチウネ」により、彼を知る日本人が増えたのはうれしい。

本稿では、千畝とともに困難な時代を生き、夫を支えた幸子夫人の著作を推薦する。

ヒトラー率いるナチス（ナチ党）は独自の人種理論に基づき、ユダヤ人を寄生虫のようにみなし、強制収容所での虐殺が悪名高い史実だが、ユダヤ難民を救うビザを発給したい千畝の打診を日本本国の外務省は不許可とした。彼は外交官として本国に従う義務はあるが、それでは難民が逃げ場を失い、ドイツに捕まってしまう。

彼は、領事館に押し寄せ、ビザを求めるユダヤ難民を前にして苦悩を続ける。しかし、ついに「苦慮、煩悶のあげく、私はついに人道博愛精神第一という結論を得た」。外務省命令に背き、ビザ発給を決断したのだ。ドイツと不可侵条約を結んでいたソ連に命令されて退去する 1940 年 9 月までの 2 か月間、不眠不休で、万年筆が折れ、腕が痺れて動かなくなる寸前でも、一人でも多く救いたい一念でビザを書き続ける。リトアニアを去るための列車の発車直前まで、彼はビザを発給し続けた。

千畝一家は、その後生命の危機にさらされながら、ようやく戦後の日本に生還したが、祖国で待ち構えていたのは、独断でユダヤ人にビザを発給した彼の越権行為に対する外務省からの解雇（追放）という厳しい処分だった。あろうことか、「杉原はユダヤ人から大金をもらってビザを出した」という噂まで流されていた。

千畝は不遇の戦後を過ごすか、命を救われたユダヤ人は、恩人の千畝を捜し出し、彼はイスラエル政府から「諸国民の中の正義の人」賞を受けた。2000 年に出身地の岐阜県八百津町「人道の丘公園」に杉原千畝記念館が開館し、外務大臣が遺族にかつての外務省の非礼を詫び、60 年前の彼の勇気ある行為を顕彰する、珍しい声明があった。

千畝がユダヤ難民を見殺しにしたら、戦後、世界から「日本はドイツの片棒を担いだ」と非難を浴びたおそれがあり、彼は日本の外交上の名誉をも救ったといえる。

千畝の勇気ある行動を支えたのは、夫を信頼した幸子夫人の勇気と愛情だったことを忘れることができない。千畝はドイツの国家秘密警察に監視され、ソ連にも要注意人物としてマークされ、常に幸子夫人や子供も危険にさらされた。映画では、ビザ発給を決断した千畝に対し、幸子夫人が「あなたは困窮した人を見て黙っていることなどできない人だ」と同意する場面がある。幸子夫人の理解なくして、千畝の英断はなかったのだ。

この本を読み、英雄的行為は、家族愛や夫婦愛に支えられていることがあると気づくのではないか。「人道」の実践者としては、ナイティンゲール、デュナンや佐野常民を思い浮かべるだろうが、杉原千畝と幸子夫人も「人道」の人だったことを知ってほしい。

【紹介された本】

『六千人の命のビザ』 新版第 2 版 杉原幸子著 大正出版 1994.4

* 当館でも所蔵しておりますので、どうぞご利用下さい。（請求記号／916 : Su34）